

初産婦における助産所出産選択の意思決定要因と出産体験の分析

An Analysis of Factors which Influenced Making Decision of Delivery at the Maternity Home and the Childbirth Experience in the Case of Primipara

宇都弘美*・川畑由佳子**

Hiromi Uto, Yukako Kawabata

*鹿児島女子短期大学 **いちご助産院

抄録：研究目的は初産婦の助産所出産選択の意思決定要因を明らかにすることと、出産体験を分析することである。A助産所出産を選択し研究協力の得られた初産婦5名を対象に、半構成式面接を妊娠中及び出産後の2回（1名は出産後のみ）実施した。内容は逐語録を作成し質的帰納的に分析した。結果、助産所出産を選択した要因は、【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】の実現場所として主体的に助産所出産を選択していた。【助産師のこだわりに対する共感】と【家族の同意】がその選択を後押しした。さらに、妊娠期からの良い関係が【助産師への信頼】を生み、主体的に出産することで【出産の満足感】が得られ、入院生活は【家族との良い関係・時間】をもたらしていた。特に食事に対しての【助産師のこだわりに対する共感】から、退院後の食事作りに生かしたいと入院生活は【今後に繋がる学び】にもなっていた。

Key words：助産所出産、助産師、出産の満足感、こだわり

I. 緒言

我が国における出産場所は1950年では約96%が自宅・助産所¹⁾であったが、その後病院や診療所といった施設に移行し、2014年現在、助産所出産の割合は0.8%で、自宅出産の0.2%を加えても自宅・助産所出産の割合はわずか1%である。

このような状況の中ではあるが、一部の女性たちは出産に関しての自分のニーズに応じてくれる場として助産所出産を選択している。助産所での出産を選択する女性は、出産そのものに対する自分の明確な意思を持ち^{2~3)}、病産院で出産した女性よりも満足度が高く^{3~4)}、豊かな出産体験をしている^{5~6)}ことが先行研究で明らかにされている。

そこで、本研究の目的は、分娩を取り扱う有床助産所が県内に4カ所といったB県内の一助産所であるA助産所での出産した初産婦の助産所出産選択の意思決定要因を明らかにすることと、助産所出産の体験を分析することである。

II. 研究対象及び方法

A助産所出産を選択し、研究協力の得られた初産婦5名を対象として、助産所内にて半構成式面接を妊娠中及び出産後の2回実施した（1名は出産後のみ面接）。

面接内容は逐語録を作成し、質的帰納的に分析した。尚、本研究は大学倫理委員会の承認後実施し、研究参加者には書面で同意を得た。

調査内容は、助産所での出産を選んだ理由、助産所の助産師に受けたいケアとケアを受けた感想などである。

調査期間は、平成26年5月23日から平成27年4月16日までである。

III. 結果

1. 対象者の背景

研究参加者の平均年齢は29.4歳であった。里帰り出産の有無については、対象者の5名中4名が里帰り出産であった。

2. 助産所出産選択の意思決定要因（表1）

分析の結果、A助産所での出産の選択に繋がった理由は、17のサブカテゴリーと5つのカテゴリーで構成された。

文中ではカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >で表す。

A助産所での出産の選択に繋がった理由として、初産婦は自身の抱えている【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】

の実現場所として主体的に助産所出産を選択するという出産に対するこだわりを持っていた。またその選択においては、【助産師のこだわりに対する共感】と、【家族の同意】が助産所出産の選択を後押ししていた。

以下、カテゴリとそれぞれに含まれるサブカテゴリを示す。

1) 病・産院の医療に対する疑問

【病・産院の医療に対する疑問】は、＜医療行為の否定＞＜病院でのケアシステムへの疑問＞の2つのサブカテゴリから構成された。

2) 助産所に関する情報

【助産所に関する情報】は、＜出産した友人・知人からの情報＞＜助産所自体への興味＞＜HPを見て＞＜助産所の見学をして＞の4つのサブカテゴリから構成された。

3) 思い描く出産

【思い描く出産】は、＜安心して産みたい＞＜自然に産みたい＞＜生まれてくる子どもの力を信じて産みたい＞＜自分の産む力を信じて産みたい＞＜自分のしたいお産ができそう＞＜妊娠中から1対1で対話ができる＞＜一人ひとりに合ったお産ができそう＞の7つのサブカテゴリから構成された。

4) 助産師のこだわりに対する共感

【助産師のこだわりに対する共感】は、＜助産所の食事に共感＞の1つのサブカテゴリであった。

5) 家族の同意

【家族の同意】は、＜夫が助産所出産に同意した＞＜義母が助産所出産に同意した＞＜実母が助産所出産に同意した＞の3つのサブカテゴリから構成された。

3. 助産所出産の体験の振り返り (表2)

分析の結果、助産所出産の体験の振り返りは、14のサブカテゴリと5つのカテゴリで構成された。

助産所出産の体験の振り返りでは、妊娠期からの助産師と築いた良い関係をもとに【助産師への信頼】が生まれ、主体的に出産することで【出産の満足感】が得られ、助産所での出産や生活は、出産前後の【家族との良い関係・時間】をもたらししていた。また、女性たちの発言からは、特に食事に対しての【助産師のこだわりに対する共感】が感じられた。また助産所での入院生活は、退院後の食事作りや今後の生活に生かしたいとの言葉も聞かれ、【今後に繋がる学び】ともなっていた。

以下、カテゴリとそれぞれに含まれるサブカテゴリを示す。

1) 助産師への信頼

【助産師への信頼】は、＜助産師の対応に満足＞＜安心感があった＞＜退院してからも相談に乗ってもらえそう＞の3つのサブカテゴリから構成された。

2) 出産の満足感

【出産の満足感】は、＜自分・赤ちゃん・助産師の皆で産んだ＞＜赤ちゃん・家族・助産師に感謝＞＜自分で産めた＞＜また助産所で産みたい＞＜家族に見守られながら産めて良かった＞＜お産は満足だった＞の6つのサブカテゴリから構成された。

3) 家族との良い関係・時間

【家族との良い関係・時間】は、＜夫と一緒に産んだという感覚がある＞＜夫も一緒に子育てできていると感じる＞の2つのサブカテゴリから構成された。

4) 助産師のこだわりに対する共感

【助産師のこだわりに対する共感】は、＜こだわりの食事に共感＞の1つのサブカテゴリであった。

5) 今後に繋がる学び

【今後に繋がる学び】は、＜食事は勉強になる＞＜自分の生活を見直す視点が持てた＞の2つのサブカテゴリから構成された。

IV. 考察

1. 助産所出産選択の意思決定要因

今回A助産所での出産を選択した初産婦は、「もともと病院には行かないほう」「お産は病気ではない」といった＜医療行為の否定＞や、「病院での対応が機械的で不快だった」といった＜病院でのケアシステムへの疑問＞が、【病・産院の医療に対する疑問】に繋がり、【思い描く出産】ができそうな病・産院以外の分娩施設である助産所に関心を向けることに繋がっていた。よって、初産婦の助産所出産の選択においては、妊娠以前からの医療機関とのかかわりや考え方が、大きく影響していた。佐々木⁷⁾は、「救急処置を中心とした医療体制が不十分な助産所分娩を選択した者は、助産所での出産を意思決定することで、正常な経過になるように自己管理をする意識が高くなる」と述べており、本研究対象者も妊娠以前からの健康に関しての自己管理に自信があり、妊娠・出産時もそれを継続できると考えたのであろう。

【思い描く出産】の実現場所選択では、＜出産した友人・知人からの情報＞や＜助産所自体への興味＞から助産所出産を検討し、実際に＜HPを見て＞＜助産所の見学をして＞、主体的にA助産所での出産を選択していた。また初産婦が【思い描く出産】は、＜安心して産みたい＞＜自然

に産みたい><生まれてくる子どもの力を信じて産みたい><自分の産む力を信じて産みたい><自分のしたいお産ができそう><妊娠中から1対1で対話ができる><一人ひとりに合ったお産ができそう>と、やや抽象的な面もあるが主体的で目的意識を持ったものであった。これは、助産所出産を選択する妊婦は出産に対して目的意識が高く主体的である^{2~3,8)}とした先行研究と同様であった。

さらに助産所出産選択に夫や義母、実母が同意したこともその選択の後押しになっており、逆に身近な家族が助産所出産に同意しなければ、その選択は難しくなるということが改めて確認できた。

2. 助産所出産の体験の振り返り

A助産所では、妊娠期は通常、管理者である常勤助産師1名がケアを行っている。それにより妊娠期から一貫した支援が可能となり、出産時の<助産師の対応に満足><安心感があった>や、<退院してからも相談に乗ってもらえそう>といった【助産師への信頼】がうかがえる発言につながった。先行研究では、「継続的で一貫した支援を提供することで助産師への安心感・信頼が確固となり、妊産婦が主体的な出産に向けて行動していた」⁹⁾、「妊婦にとって信頼のおける助産師が、出産に向けて心身を整えていくことの重要性を繰り返し説くからこそ、妊婦は少しずつ主体的に妊娠・出産に取り組もうと自覚を持つ」¹⁰⁾と述べている。信頼できる助産師が傍らにいて、産婦は自らが【思い描く出産】に向けて主体的に取り組むことができるのである。A助産所の【助産師への信頼】は、前年度に行った同助産院での経産婦に対する調査でも同様で、初産、経産に関わらず、同助産師のケアが信頼に足るものであることを裏付けていると考える。

信頼している助産師や家族とともに出産し、初産婦は、<自分・赤ちゃん・助産師の皆で産んだ><赤ちゃん・家族・助産師に感謝><自分で産めた><また助産所で産みたい><家族に見守られながら産めて良かった><お産は満足だった>と【出産の満足感】を感じていた。鈴木³⁾は、出産の満足感につながる因子として、「出産に関する環境」「お産の経過」「精神的サポート」の3つを挙げている。今回の調査でもA助産所という環境や【思い描く出産】が実現でき、出産を振り返った時にその経過を客観的にプラス評価できたこと、助産師や家族の精神的サポートを受けられたことが、最終的な【出産の満足感】につながった。また、出産後には研究対象者全員が具体的な言葉で語ってはいなかったが、助産所出産の選択理由で語られた<自分の産む力を信じて産みたい><自分のしたいお産できそう>と

いった【思い描く出産】ができた、<自分で産めた>、自分には産む力があつた、自分のしたいお産ができたことも、【出産の満足感】に繋がったと考える。この出産体験は、初産婦に自信をもたらしたに違いない。自信は、自分自身の能力を信じることである。二川¹¹⁾は、「自分の力を全活用せず妊娠・出産を終えることは、女性の人間的な成長・新しい自分の獲得を抑制することにもつながる」と述べており、自分を信じ、主体的に出産に取り組んだ女性は、人間的に成長できることを逆説的に示している。出産体験で得た自信が、今後の子育てをする上での力になると考える。

A助産所では、出産前後に家族が泊まり込んで一緒に過ごすことが出来る。それによって、<夫と一緒に産んだという感覚がある><夫も一緒に子育てできていると感じる>といった【家族との良い関係・時間】を初産婦は感じていた。現代は核家族が一般的で、里帰り先から自宅に帰ると母親一人で育児をする時間がどうしても多くなりがちであるが、出産直後に夫と一緒に育児をした時間や経験が、自分がつらい時には夫がきっと助けてくれるであろうという夫との絆の強まりをもたらすと考える。それは、少人数の入院患者を対象としている助産所ならではの入院環境がもたらす良い効果とも言えよう。

また、女性たちの発言からは、特に食事に対しての【助産師のこだわりに対する共感】が感じられた。また助産所での入院生活は【今後に繋がる学び】ともなり、退院後の食事作りや今後の生活に生かしたいという言葉も聞かれた。私達の身体は、私達が食べたもので出来上がっている。初産婦は、食を大事にすることは健康に生きていくために欠かせないことを出産後の生活で再確認し、今後、家族の健康を自分の作る食事を守っていこうと考えた。

最後に、緒言で述べたように助産所での出産は、全出産数のわずか1%である。どこで、どのように出産するかを妊婦が主体的に考え、選択できるような情報の提供が今後さらに必要と考える。そうすることによって、最終的にどこで産んでも満足度の高い出産に一步近づくことができるだろう。一人の女性が一生のうちに体験する出産数は少ない。多くの女性が人生の中の数少ない出産に主体的に臨み、かつそれが満足できることが、その後の育児に取り組む大きな力になっていく。病・産院等での出産であっても妊産婦の出産についてのニーズを受け止め、常にその希望に寄り添ったケアを妊娠期から一貫して、可能であれば同じ助産師が行い、産婦が家族の見守りやサポートを受けながら出産することが出来れば、それは実現できる。

V. 研究の限界

本研究は、B県内の一助産所での出産を選択した女性への調査であり、症例数も少ないことから、導かれた結果には限界がある。

今後は研究の症例数を増やして、本研究の信頼性や妥当性を高めたいと考える。

VI. 結論

一施設での調査ではあるが、助産所出産を選択した要因として初産婦は、自身の抱いている【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】の実現場所として主体的に助産所出産を選択するという出産に対するこだわりを持っていた。またその選択においては、【助産師のこだわりに対する共感】と、【家族の同意】が助産所出産の選択を後押ししていた。

助産所での出産は、妊娠期からの助産師と築いた良い関係をもとに【助産師への信頼】が生まれ、主体的に出産することで【出産の満足感】が得られ、助産所での出産や生活は、出産前後の【家族との良い関係・時間】をもたらしていた。また、女性たちの発言からは、特に食事に対しての【助産師のこだわりに対する共感】が感じられた。また助産所での入院生活は【今後に繋がる学び】ともなり、退院後の食事作りや今後の生活に生かしたいとの言葉も聞かれた。

謝辞

本研究にご協力頂いた妊産褥婦の皆様へ深く感謝いたします。

尚、本研究の一部は、第56回日本母性衛生学会で発表された。

表1 助産所出産選択の意思決定要因

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---------------|---------------------|
| 病・産院の医療に対する疑問 | 医療行為の否定 |
| | 病院でのケア・システムへの疑問 |
| 助産所の情報 | 出産した友人・知人からの情報 |
| | 助産所自体への興味 |
| | HPを見て |
| | 助産所の見学をして |
| 思い描く出産 | 安心して産みたい |
| | 自然に産みたい |
| | 子どもの生まれてくる力を信じて産みたい |
| | 自分の産む力を信じて産みたい |

| | |
|----------------|------------------|
| | 自分のしたいお産ができそう |
| | 妊娠中から1対1で話ができる |
| | 一人ひとりに合ったお産ができそう |
| 助産師のこだわりに対する共感 | 助産所の食事に共感 |
| 家族の同意 | 夫が助産所出産に同意した |
| | 義母が助産所出産に同意した |
| | 実母が助産所出産に同意した |

表2 助産所出産の振り返り

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|----------------|--------------------|
| 助産師への信頼 | 助産師の対応に満足 |
| | 安心感があった |
| | 退院してからも相談にのってもらえそう |
| 出産の満足感 | 自分・赤ちゃん・助産師の皆で産んだ |
| | 赤ちゃん・家族・助産師に感謝 |
| | 自分で産めた |
| | また助産所で産みたい |
| | 家族に見守られながら産めて良かった |
| 家族との良い関係・時間 | お産は満足だった |
| | 夫と一緒に産んだという感覚がある |
| 助産師のこだわりに対する共感 | 夫も一緒に子育てをできていると感じる |
| | こだわりの食事に共感 |
| 今後に繋がる学び | 食事は勉強になる |
| | 自分の生活を見直す視点がもてた |

文献

- 1) (公財) 母子衛生研究会：母子保健の主なる統計 平成26年度刊行。母子保健事業団，2015。
- 2) 篋伊久美子，二瓶良子他：妊婦の主体的な出産に関する意識調査。母性衛生，43(1)，178-187，2002。
- 3) 鈴木敬子，大町寛子他：女性が出産に望むこと－助産院での調査より－。母性衛生，44(1)，98-104，2003。
- 4) 鈴木静，高橋弘子他：フリースタイル分娩をした産婦の分娩の達成感。母性衛生，46(4)，625-632，2006。
- 5) 竹原健二，野口真貴子他：助産所と産院における出産体験に関する量的研究－‘豊かな出産体験’とはどういうものか？－。母性衛生，49(2)，275-285，2008。
- 6) 長谷川文，村上明美：出産する女性が満足できるお産－助産院の出産体験ノートからの分析。母性衛生，45(4)，489-495，2005。
- 7) 佐々木綾子，田邊美智子：初産婦における助産所分娩選択の意思決定要因と分娩体験の認識に影響する要因の検討。

福井医科大学研究雑誌, 1(1), 147-164, 2000.

- 8) 宇都弘美, 川畑由佳子: 経産婦における助産所出産選択の意思決定要因と出産体験の分析, 南九州地域科学研究所所報, 31, 7-11, 2015.
- 9) 柴田真希: 助産所出産を選択した経産婦の意識や行動, 日本母子看護学会誌, 6(2), 21-30, 2012.
- 10) 竹原健二, 岡本菜穂子他: 助産所で妊婦に実施されているケアに関する質的研究-助産所のケアの‘本質’とはどういうものか-, 母性衛生, 50(1), 190-198, 2009.
- 11) 二川香里, 永山くに子: 妊産褥婦の主体的な取り組み-助産院での縦断的面接を通して-, 母性衛生, 46(2), 257-266, 2005.

(平成28年1月20日 受理)